Fate/zero ～ＢＵＧ～

秋田知佳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｆａｔｅ／ｚｅｒｏ　～ＢＵＧ～

【Ｎコード】
Ｎ７０６６Ｙ

【作者名】
秋田知佳

【あらすじ】
「私はただの兵器だった。
兵器という定義でよかったのに、神様は私になんて面倒くさい役割を与えたんだろうか。」
戦場という殺戮の、確立された世界で生きたきた少女が、新たなる戦争に突き落とされる―。

◎作者の趣味と妄想爆裂です。ごめんなさい。

#01　始まりという名の始まり（前書き）

アニメ『Ｆａｔｅ／Ｚｅｒｏ』を見て鳥肌のたった作者が、妄想と理想をおっぴらにしてしまいました。
ごめんなさい。

#01　始まりという名の始まり

私はただの兵器だった。

こんな冒頭ではじめたら、さそがし私が奇妙な人間に見えるだろう。
いや――、もはや人間でもない。
人間兵器、と揶揄しては人間に失礼にあたるくらい、私は人間ではなかった。

私は無数の人を殺してきた。
殺戮に殺戮を重ねて、殺戮をしてきた。
『戦場』という用意された箱庭の中で、私はただ無作為に、無意味に他者を殺してきた。

ただ、生業として。

そんな私の死に様は、最強と歌われた私の死に様はひどく滑稽だと思う。
事故死。
誰の他意もなく、誰からの敵意も感じず、誰からの悪意も読み取れず、
私はただ必然のようにトラックに轢かれた。

そう、何からも警戒できなかったからかもしれない。
これが私にお似合いの死に様だった。
せめてルキ―これは私の愛するＭＰ５ＳＤ６という短機関銃である―は、きちんと供養してやりたかった。

というわけで、私は今、神の御前にいる。

目の前の人物を『神』とよぶのは正直とてつもない嫌悪感を抱いている。

目の前でにたにた笑っている人物に、初めての殺人衝動を抱く程度の嫌悪感だが。

「僕ぁね、君にぃとっても申し訳ないことをぉしたと思ってるんだよねぇ。」
いまこの手にルキがいれば、こいつは迷わず撃たれていただろう。

「だからぁ、君をねぇ『転生』させてあげるねぇ。」

「・・・いらない。」
思わず言葉を漏らしてしまった。

「えぇー。そんなこといわないでよぉ。
僕だってねぇ、初めての失態なんだよぉ。
まさか世界の『分岐点』とぉ『悪点』とぉ『修正点』をぉ一緒にしちゃうなんてぇ、さすがの僕でもできないと思ってたもん。
だからぁ、君は『ノイズ』でありぃ、『不協和音』なのぉ。」

「・・・。」
何を言いたいかがさっぱり分からなかった。
言葉が通じないのか。
気持ち悪い。

「うんうん。わかんないよねぇ。
君はねぇ、自分をしらないんだもんねぇ。
だから僕がぁ『自分探し』をぉさせてげる。

きゃは！ぼくカッコいい☆ノ」

逃げたい。
本能的に逃げたくなった。

「デフォルトで君に人格をあげるね。
それはもともと君の者なんだけど、同時に君が傷つけ、壊し、殺したもの。
それを再構成して、君はＢｕｇとして、世界を修正すること。」

ＢＵＧ？？
世界の修正？それはいったいなんだ？

「君はまだ空っぽ。空虚な人形のまま。
君は、いったいだれないんだい？」

世界の『悪天』。
それはいったい―。

「さようなら。
探しておいで。見つけておいで。」

世界がゆがむ。
白銀の風景が崩れた。

「Ｄｅａｒ　Ａｎｇｅｌ」

＃０１　始まりという名の始まり（後書き）

感想をいただけたらたいそううれしゅうございます。

＃０２　落下、召喚、初陣（前書き）

ここからところどころ三人称がでてきます。
お気に入り登録、評価、ありがとうございます！！

#02　落下、召喚、初陣

気が付いたら、少女は落下していた。

空の彼方から、地上に向かって、パラシュートもなしに落下していた。

「流石に無理があるのですよ！」
少女は叫ぶ。

しかし。
その顔は恐怖に引き攣っているわけではなかったのだ。

少女はこのどうしようもない状態で笑っていたのだ。

やばい。楽しすぎる。
ぞくぞく一興奮が止まらない。

「なぎ、楽しすぎます！！」

SEID　渚　　@

その後わたしは無事に、生きて地上に足を着けた。
理由は簡単。『柔らかい生き物』の上に、正確には巨大な牛の上

におじゃましているからだ。

「わふー。命綱なしのバンジージャンプ、なんて、なぁんてふぁんたすちっくなんでしょう！！」

少女は牛の上に立って、周囲を見下ろした。
そこにはどうやら鎧をきたかっこいいお姉さん、エルフみたいな可愛らしい女性、そして２つの槍を持ったイケメンがいた。

「お前、何者だ。」
がしゃん。
形の見えない剣が向けられた。

ぞくぞく。ぞくぞくぞく。
背中が張る。全身が歓喜に震える

あぁ懐かしい！
なんて懐かしい『敵意』なんだろう。
相手があまりにも正義過ぎて、正しすぎてわたしは思わずにやけてしまった。

「うひょー！なんだかとっても懐かしい感覚ですよ？なぎ、ぞくぞくしてますっ。」
手を伸ばす。
ポケットには、きちんとルキがいてくれた。

「言葉が通じないのか？」
美人のお姉さんは、眉毛を怪訝そうに曲げた。

あ、強い。
わたしはそう思った。
この人は意志を持って皆を守るために戦う人だ。正義の騎士？
いや――。英雄だ。

「にゃは。ごめんなさい。えーっと残念ながらなぎはその問いには答えられないのです。
何故ならなぎはいま自分探しの旅の真っ最中なのです！
強いて言うなれば、識別名は石凪渚ですよ。なぎが２つ。綺麗でしょ？」

たぶんここでは今まで何かしらの『戦い』が繰り広げられていたのだろう。
そういう『波紋』があった。

「ごほん。少女よ。我の愛すものからいい加減どいてくれんかの。」

そこには大柄な男がいた。
赤い鎧を間にまとった、男が。

「はっ！なるほど。今日は全世界共通の仮装の日なのですね！なぎ、全く気がつきませんでした。」
ぴょん、とわたしは飛び降りると牛に向かって「ごめんなさい」

と頭を下げた。

【――――汝ニ我ハ要求ス。戦イニ参加シ、世界ヲ正シキ方向ニ導キナオセ、ト】

「えーっと、なにやらこの文章を朗読しなければならないようなのです。」

わたしは目の前に怪しげに浮かび上がる文字に目をこらした。

「なになに。うーんっと、
『我、石凪渚はこたびの聖杯戦争にｂｕｇとして召喚された。我は世界を破壊という形で修正する。異分子として、我はルールに囚われず、こたびの聖杯戦争に参加する。』」

ケタケタ。

ケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタ

ケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタ

ケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタ

ケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタ

ケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタ

ケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケ

タケタケタケタ
ケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケ
タケタケタケタ
ケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケ
タケタケタケタ
ケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケ
タケタケタケタ
ケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケ
タケタケタケタ
ケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケ
タケタケタケタ
ケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケ
タケタケタケタ
ケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケ
タケタケタケタ
ケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケ
タケタケタケタ
ケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケ
タケタケタケタ
ケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケ
タケタケタケタ
ケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケ
タケタケタケタ
ケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケ
タケタケタケタ
ケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケ
タケタケタケタ
ケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケ
タケタケタケタ
ケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケ

タケタケタケタ
ケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケ
タケタケタケタ
ケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケ
タケタケタケタ
ケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケ
タケタケタケタ
ケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケ
タケタケタケタ
ケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケ
タケタケタケタ
ケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケ
タケタケタケタ
ケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケ
タケタケタケタ
ケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケ
タケタケタケタ
ケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケ
タケタケタケタ
ケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケ
タケタケタケタ
ケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケ
タケタケタケタ
ケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケ
タケタケタケタ
ケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケ
タケタケタケタ
ケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケ
タケタケタケタ
ケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケ

タケタケタケタ
ケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケ
タケタケタケタ
ケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケ
タケタケタケタ
ケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケ
タケタケタケタ
ケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケ
タケタケタケタ
ケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケ
タケタケタケタ
ケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケ
タケタケタケタ
ケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケ
タケタケタケタ
ケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケ
タケタケタケタ
ケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケ
タケタケタケタ
ケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケ
タケタケタケタ
ケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケ
タケタケタケタ
ケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケ
タケタケタケタ
ケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケ
タケタケタケタ
ケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケ
タケタケタケタ
ケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケ

タケタケタケタ
ケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケ
タケタケタケタ
ケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケ
タケタケタケタ
ケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケ
タケタケタケタ
ケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケ
タケタケタケタ
ケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケ
タケタケタケタ
ケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケ
タケタケタケタ
ケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケ
タケタケタケタ
ケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケ
タケタケタケタ
ケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケ
タケタケタケタ
ケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケ
タケタケタケタ
ケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケ
タケタケタケタ
ケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケ
タケタケタケタ
ケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケ
タケタケタケタ
ケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケ
タケタケタケタ
ケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケ

タケタケタケタ
ケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケタケ
タケタケタケタ

笑いが止まらない。
ひたすら笑いが止まらない。

「流石に知ったこっちゃ無いんですよぉ！！」

今度は泣きたくなった

#03　決意、入手、違和

「ごほん。」
少女は咳払いをした。

「わたしはですね、どうやらなかなかに不条理な環境の下に召喚されてしまったようです。
いや、神様なんてものがいない、例えいたとしてもくそったれに違いないということは理解していたのですがね。
しかし神様には常識もなにも通じないというほどのスカポンタンだとは。
なぎ、失態です。あの場で迷わず神様を抹殺しておけばよかったんです。」

独り呟く少女はさぞかし奇異に見えただろう。
それか、なんらかの術式を唱えているか、か。

だがしかし

「わかりました。」
ぱちん。と少女は指を鳴らした。

「ではなぎはこうしようと思います。
まずなぎは、あなた方が一体何を巡りこの『せぇはいせんそう』に参加しているかが理解できないのです。
というより理解を導くための知識がたりない、というのでしょうか。
その知識を収集してから細かい事を決めようと思うのですが、取り敢えずなぎは貴方がたに危害を加えないことをお約束します。

そしてなぎはなぎに与えられた役割とやらをいやいやですが見つけ、そしてこのような『仕事』押しつけた張本人となんとかしてコンタクトを取るべくがんばってみます。」

少女はにっこりとして言う。

「世界の修正なんて、んなことなぎの知ったこっちゃないんですよ。」

冬木の地で、色々な『時代遅れ』の人物に会った少女は言う。

自分はこの世界をとりあえず見捨てる、という事を。

@

その後少女が下した決断は、すぐさまその場から立ち去るということだ。

少女が確立した兵器として存在していたころ、唯一学んだこと。

それは『戦う』ことでもなく、『助かる』ことでもなく、

ましてや『他人を救う』ことでもなくただそれは―、

それは『生き残ること』であった。

少女はそれを自らの本能として、生き残るための最善の手段として、

『闘争』ではなく『逃走』を図った。

そうして彼女は今、飛行機を乗り継ぎ、ロンドン（ビッグ・ベン）の時計塔にいた。

「あうー。本来ならば神様っつーもんが召還と同時に知識を入力（インストール）しておくのが筋ってもんじゃないんですか？
なぜなぎがこんな面倒くさい目にあわなければならないのかが理解できないですし、
そもそもなぎの『拠点』がないってのはひどすぎるでしょう。」

では無一文だった少女がここまでこれたのは何故か。
それはもちろん、神の手によって資金が用意されていたからである。
その膨大さに少女は、「無駄な力つかってんじゃねぇよ。」と思わず暴言を吐いた。

少女はこの世界の世界観についてまったくといっていいほど理解していない。
『神様』という存在は一応定義として認めているが、非科学的なものに関してはまったく信じていない。

だがしかし。

少女は非力なままであるはずがない。
ＢＵＧとしての少女が、無力で、非力で、そして無知であっていいはずがないのだ。

そんなのでは、少女は世界を救えないのだから。

「さぁ、いってみましょうか。」
少女が時計塔の中へ足を踏み入れた矢先―。
魔術という名の概念が、少女の中をあふれ出す。

【神に召還されし憐れな少女よ。】
【何も知らず、何も持たない空虚な少女よ。】
【生存を許されなかった無力な少女よ。】

言葉が意思を持って少女に話しかける。

【我等が汝に力を与えようぞ。】
【汝の所持していた微々たる鮮血の戦力よりも、】
【もっと高貴で、もっと気高く、もっと美しい神があたえし無双の本能を。】

【世界の命運など、放っておいともよい。】
【これは汝だけの”力”だ。】
【汝が見つけ、汝が探し、そして汝が手に入れる力だ。】

【さぁどうする少女よ。】
【汝は欲するか。】
【己のために、力を欲するか。】

少女はためらわない。
自分だけの力。
道具ではない。彼女のための力。

それが目の前にあるのにどうして求めずにいられようか？

「ほしいです。」

少女は小さく、ただしハッキリと彼女の意思を述べた。

「わたしに、その力を下さい。」

誰か分からない目の前の相手に。
彼女は頭を下げた。

【【【よかろう。】】】

声は答えた。
かすかに—微笑んでいるような声だった。

【汝の名は？】

「わたしは、石凪渚。
世界のＢＵＧです。」

そして視界がブラックアウトし、少女は力を手に入れた。

＃４　実感、出会い、発見

絶対に、おかしい。
少女は思った。
それは、自分の血の流れ。
物理的な体力とは違う、有り得ないほどのもう一つの力。
少女はその本質を、本能的に感じ取っていた。

「ここ……どこ？」
時計塔の前で倒れたところまでは少女は記憶している。
しかし少女は時計塔の前ではなく、別の場所――正確に言えば事務室のような場所――に居た。

「あぁ、目が覚めましたか。」
そこに立っていたのは、２０代半ばの青年だった。

「僕はここの清掃員なんですけどね、女の子が倒れているのでビックリしましたよ。
時計塔の生徒さんですか？それならこの奥の通路を通って行けばいいですよ。」
（まじゅつ…し。）
少女にはそれが何を指すのかが分からなかった。
ただしかし、その場所が、これから少女が扱わなければならない力を操る場所だということを悟った。

「あ、そうなんですー。私、体が弱くって。
よく倒れるんですよねー。あはは。困っちゃいます。」
少女は明るく笑う。

「それは大変ですね。
僕も詳しいことは知りませんが、魔術師って奴は体力使うらしいですよね。
気をつけてくださいね。」
人のよさそうな青年は、心配げに言う。

「はいー。どうもありがとうございましたー。
それでは。」
少女はぺこりと頭を下げてポケットから短針を取り出した。
麻酔弾、と呼ばれるそれは、前後の記憶を錯乱させ意識を失わせる物だった。
そっと銃に装填させると、少女は一切の躊躇いも無く撃った。

「残りが少ないのです。どこかで調達できませんかねー。」
そういい残すと、少女は通路に足を伸ばした。

@

少女が真っ先に向かったのは図書館だった。
すでに午後8時を下回っているころだったが、学生達は2、３０人はいた。
（うはー。探しにくいのですー。手が滑ってしまうかもですね。）
そう罵倒しながらも少女はくまなく戸棚を調べていく。
（『よくわかるせぇはいせんそー』とか『初心者必見☆せぇはいせんそーの全て』みたいな本ありませんかねー。）
そして少女が見つけたのは3冊の本。
『古代魔術史』、『現代魔術の歴史』、そして前頁が白紙の本。
とにかく片っ端から当たってみよう、と少女は頁を捲る。

もう半分くらいまで進んだろうか。
一向にヒントはつかめない。
（やっぱり極秘情報なんですかねー。）

「君、ちょろっとお姉さんとお話しない？」
頭上から少し低めの、しかしよく響く声がした。
少女が顔を上げると、真正面に褐色の肌をしたショートカットの女が居た。
年は１７、８程だろうか。

「うわわわっ！」

「あらー。やっぱ不審者に見えるのかなぁ。
かわいい子猫ちゃんを発見したから声をかけてみたんだけどなー。
あ、私サラーニャ＝アルド＝アーチボルトって言うんだけど、クソ長いからサラって呼んで。
君は？」

「あっ、う、はい。石凪渚と申しましゅ！ひっ、噛んじゃった……。」
その姿をサラーニャはじっと見ていた。
そして突然ぎゅーっと少女を抱きしめた。

「うわっ！なにこの生き物！！超かわいいんだけど！ちょっとうちにお嫁に着てよ！
やばい。飼いたい！とゆーかナギ、何やってんの？」

「調べ物、です。」

「ほぉ。勉強熱心なのね。しかしここに天下無双のサラ様がいるじゃないですか！」

「？」

「あっれー？もしかしてもしかしてもしかして知らない、というの？」

「すっ、すみません。」
サラーニャはふーん、と手を顎にあてる。

「ナギみたいな美少女、私が知らないわけ無いわ。
ナギ、どっから着たの？」

「あー。不法侵入なのです☆」
少女はてへへ、と笑う。

「そうなんだ。どーりで見かけないわけね。
って、ちょっと！え？君なにやってんの？だめでしょ！」

「まーまー。当たって砕けろです。」

「砕けちゃ駄目でしょ！？」
はぁ、とサラーニャはため息をついた。

「なんで時計塔にパスなしで入れるのよ。そんなのばれたら前代未聞よ。」

「ばらなきゃーおkなのですー。それに悪用しないですからねー。
私、魔術師じゃないですから。」

そこでピタ、とサラーニャの動きが止まった。

「魔術師じゃ、ない？」

「正確にはこれから魔術師になろうってとこなのです。」

「……なるほど、ね。」

パチン、と少女は手をたたいた。

「とにかく、これはなぎとサラさんの秘☆密なのです！

おっけー？」

「…わかったわ。君が悪い人じゃないってことは分かったから。

で、何を探しに着たの？」

「はっ！そうでした。

なぎはですねー、あれです。

『せぇはいせんそー』について調べに来ました。」

サラーニャがばっ、と席を立つ。

「君、何者？」

先ほどとは一辺変わって、少女睨みつけた。

「あいどんとのー、なのです。」

このとき少女の胸にあったのは、唯ひたすらに歓喜だけだった。

目の前の女はきちんと殺意を持って敵意を抱いていた。

そのことに、歓喜していた。

「君、何者っ？」

言葉が、震えた。

さっきと同じ科白なのにサラーニャの声には明らかな畏怖の感情があった。
しかし、敵意を抱くことはやめない。
殺意を抱くことは、やめないのだ。
（これが、魔術師、ね。）
きちんと殺す覚悟をして勝負に挑むのだ。
素晴らしい、と少女は思った。
生きることは、楽しい！！
こんなに愉快な人たちが居るならば、この世界はぜったいに面白い。
力がほしい。力がほしい！
世界を渡る力が！
もっともっともっと、世界を楽しむ力がほしい！！！！

「　　？」

「うんっ！」

そして、風が吹いた。

#05　人、為、偽

「なにがっ起きたの！？」
サラーニャは驚愕していた。
目の前にいた少女の、驚くべき魔力に。
膨大すぎるために、名門アーチボルト家の名を持つ彼女でさえも推し量れないその魔力量に。
それはすなわち、人間の許容できる魔力量をこえているという意味を示すのだ。
「どうやらアタシは、天使に会ってしまったようね。」
サラーニャは笑う。
疾風をまとった天使に向けて。

@

「うぃーっと！無駄持ち出ししちゃったけど大丈夫ですかね？」
自分が魔術を行使できたことに、思いもよらず、戦いに参加する目的を掴めたことに、嬉々として言った。
「なぎ、生きててよかった！」
少女は満面の笑みを浮かべた。

たとえそれが、本能的に殺戮をもとめているとしても。

（とりあえず、知識を補給しなくちゃ。んじゃまー、問題ごとは関係者に聞くのがイチバンっ！）

そこで少女は時計塔から持ち出した何も書いてない本を取り出す。

「なぎがこの本に惹かれたのは、なぎの中にある魔術とかっつー特別な概念が反応したからなのだと思うのねー。つまり、なぎが何らかの方法でその概念を抽出してコントロールできればいいわけなのですっ！」

少女はしたり顔で本を見つめる。

「うーん。わかんねぇ！」

小１０分ほど経過した時だった。

「やっぱり魔法の杖がいるのかなぁ？」

割と真面目に少女は考える。

「考えてるだけでは無謀なのね。じゃあ何か書いてみる！」

そして少女は日本語で『はじめまして』と書いた。

するとどういう事か、ボールペンで書いた文字がみるみる吸収され、そこには別の言語が浮かびあがった。

「なになに？『汝は智を渇望する、ぐ？愚弄者か？』しるかよ。」

その言語は明らかに日本語ではなかった。

「なぎすげぇ！なんでこんなのよめるのー！超かっけぇじゃん！」
少女は興奮して、続けて『私は石凪渚といいます。別にぐろーしてません。突然ですがせぇはいせんそーについて教えてください。』
と書いた。

『よかろう。』
本はそれだけ答えた。突如、本はカタカタ揺れだし、本を抑えつけようとした少女のなかに、沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の
沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の
沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の
沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の
沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の
沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の
沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の
沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の
沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の
沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の
沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の
沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の
沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の
沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の
沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の沢山の
沢山
の沢山の歴史が、背景が流れだした。

そして少女は全てを理解し、その代わりに目的を見失った。

@

「君が、バグなのか。」
少女は今、教会にいた。
以前までとは打って変わって、焦点の会わない、真っ黒な瞳をしていた。
今夜は新月。少女の内側に『固定化された人格』は存在しなかった。
神が人格を与える前の、ただの殺戮兵器に戻ってしまった。
思考はする。判断はする。選別はする。しかしそこには、『インストールされた』回路しかなかった。少女自身の、意思はない。全くの零なのである。

「私は、製造番号０４４識別番号Ｃ－３６４３７８個体名ＮＡＧＩＳＡです。」
少女は何も言わない。しかし右手は確実に銃を握っている。

「私は言峰璃正。この度の聖杯戦争では監督役を努めている。」
男の声は徐々に遠ざかる。
少女はまた深い眠りに就いた。何故かは単純明快。神の与えた、『石凪渚といい人格。』が表へ出るからだ。

そう。

確かな意思と目的を持って。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7066y/

Fate/zero ～ＢＵＧ～

2012年1月6日19時49分発行